

## 日常性の芸術化 —「創造都市さっぽろ」の実質化に向けた二つの提言—

### はじめに

第 3 期（平成 24/25 年度）札幌文化芸術円卓会議（以下、第 3 期円卓会議）は、札幌における文化芸術の、長期的・中期的・短期的に取り組むべき課題について、熱心に議論を重ねてきました。その根底にあったのは、今以上に豊かな文化芸術あふれる環境のなかに暮らすことの誇りと喜びを、市民みなで分かち合いたいという思いでした。直ちに着手できるような事柄から夢のようなプランに至るまで、さまざまなアイデアが出されました。ただ、その実現には、幾多の現実的困難が立ち塞がることでしょう。しかし、私たちは単に議論のための議論をしたわけではありません。このメッセージが多くの人のもとに届き、共感を呼び、そして、やがて実現することを強く願っています。そのために、私たち自身、今回の委員としての任を終えた後も、一市民として札幌の文化芸術を支える努力を続ける所存です。

### 1 議論の前提

#### 1.1 第 1 期円卓会議からのメッセージ

第 1 期（平成 21/22 年度）円卓会議の提言は、「アーティスト-市民（企業等を含む）-市役所」の三者を「芸術の産業化」によってそれら相互の関係性を構築する、という内容でした。それに対して、三者の機能を固定化してしまう危惧はないのか、あるいは、「産業化」という概念が経済性の追求とは必ずしも相いれない芸術にとってふさわしいのか、といった意見が出されました。しかし、逆に言えば、今日あらゆる産業が芸術なしには成り立たない、また、私たちの日常生活も芸術なしには成り立たない、実際私たちの周囲には芸術的なモノやコトが多々あるのに、それを自覚することが少ないのだとも考えられます。つまり、「芸術の産業化」以上に「産業の芸術化」ないしは、「日常性の芸術化」が必要なのではないか、という認識を各委員の間で共有しました。

#### 1.2 第 2 期円卓会議からのメッセージ

第 2 期（平成 23/24 年度）円卓会議は、そのような日常性の芸術化を推進し、札幌における将来の芸術の拠点になるであろう「アーツセンター」について、その基本的理念と機能を集中的に論じるものでした。現在、札幌市では平成 30 年度に完成が予定されている市民交流複合施設とともに、そのようなアートセンターの実現を目指しています。各委員からは、これだけ具体的な提言がされているのであれば、ハードの整備を待たずとも、ソフト面でできることからアートセンターを早期に運用してはどうか、という意見が多く出されました。

### 1.3 札幌市における文化芸術振興の諸課題

こうした提言や、平成 21 年度の策定された札幌市文化芸術基本計画の見直しに向けた議論、さらに、近年の札幌市における文化芸術の動向、とりわけ、ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟と札幌国際芸術祭 SIAF 2014 の開催、あるいは、上記の市民交流複合施設とアートセンター設置の実現などを踏まえて、しかし、必ずしもそれらにとらわれることなく、第 3 期円卓会議はまず、各委員の自由な発想のもとで、現在、将来、札幌市が取り組むべき文化芸術振興施策案を、網羅的に洗い出す作業を行いました。その結果は、「文化芸術施設の整備」「文化芸術人材の育成」「ホームページ等情報発信法の改善」「文化芸術を活かした事業の展開」の 4 点に大きくまとめることができました（資料 1）。それは、具体的なものから抽象的なものまで、実にさまざまなアイデアの宝庫であり、機会あるごとにその実現を追求すべきであると考えています。

### 1.4 問題の所在—日常性の芸術化

このような検討を経た結果気づかされたことは、そうした多様な関心の中心にあるのは、市民生活にどのようにすればもっと文化芸術を浸透させることができるか、という問題でした。これは、上でも述べたとおり、第 1 期円卓会議の提言にある「芸術の産業化」とは逆の「産業の芸術化」あるいは、「日常性の芸術化」とでもいうべき立場です。それは、潤いのある生活のために芸術を活用しよう、という単純なことではありません。また、新しい芸術産業の創出・育成や、文化芸術と産業活動・経済活動との関係にとどまるものでもありません。そうしたことももちろん大事ですが、それ以上に、文化芸術は今や、教育活動や社会活動、文化的活動、また家庭や地域社会、職場などでの市民生活、さらに地球規模での社会変動や環境問題など、私たちの日常生活のあらゆる場に関係しているということです。文化芸術はそうした問題に取り組む際の解決の糸口や展望、方策を提示してくれるのです。札幌でも確実に少子高齢化が進み、人口が減少する時代を迎えて、なお私たちの市民生活の活力の持続可能性を追求するためにも、文化芸術を日常性に浸透させる必要性、必然性があるのです。「創造都市さっぽろ」の謳う「創造性」の理念もここへと帰着するものでなければならないと考えます。

## 2 アートについて

### 2.1 よそよそしいアート

しかし、こうした「日常性の芸術化」を目指すとしても、「アート」にしても「創造性」にしても、多くの市民にとってはそれを自らのものとして実感することが難しいのが現状です。アートも創造性も、どこかよそよそしく、敷居が高く、自分の生活とは無関係のところで行われている出来事のように感じています。アートや創造性は、私たち誰もが備えている基本的能力であること、生活しているあらゆる場所に存在していること、そうしたことにどうすれば気づくことができるのでしょうか。

### 2.2 「術」としてのアート

「アート」はさまざまな意味を持つ言葉ですが、語源的には芸術のみならず、学術、技術、医術、錬金術、占星術、戦術、体術などおよそ「術」の語をつけられる人間のあらゆる営みを指す言葉でした。試みにアートのない社会を想像してみましょう。それは単に絵画や音楽がないというだけではありません。私たちは着るものに気がつかなくなるでしょう。食べるものも栄養価さえとれていれば何でも構いません。住まいも寝場所さえあれば事足ります。つまり、衣・食・住のあらゆることに無頓着となり、豊かさは失われ、やがて私たちの生活は混乱し、社会は崩壊してしまいます。なぜなら、一枚の衣服にも、それをデザインした人の「術」があるからです。また、見事な調理「術」による料理を美味しいと感じる味覚が美という価値に対する判断の根源だったからです。さらに、住まうこと自体が、古今東西、総合的な「術」の結晶に他なりません。したがって、もしもアートが失われてしまえば、私たちの生活、生命すなわちライフそのものが成立しないのです。

### 2.3 人間の普遍的な能力としてのアート

さらに、「アート」とは人間の営みに対してのみ使用される概念にとどまらず、より広範な、「感じ、考え、工夫する」という私たち人間に普遍的に与えられている「能力」でもあります。このアートという能力が誰にでも備わっているからこそ、私たちは美術や音楽を楽しむことができるし、それと同じように衣・食・住の工夫もできれば、その工夫を楽しむこともできるのです。よく、私は美術や音楽が分からない、ましてや現代アートなど意味不明だという人がいます。けれども服装や料理、家具が分からない、という人は滅多にいません。なぜでしょう。それは衣・食・住のことをアートだとは思っていないからですが、しかし、美術や音楽、現代アートも衣・食・住も同じアートの能力に基づいた人間の営みなのです。

### 2.4 近代における芸術と生活の乖離

このように、本来は私たちの生活と密着していたアートを、近代の歴史はいわゆる絵画や音楽、演劇など芸術のジャンルを固定し、かつ、それを美術館やコンサートホール、劇場といった「芸術の殿堂」の中に押し込めてしまいました。その結果、芸術は日常の生活とは少しずつ無縁なものになるか、あるいはその「殿堂」には入れない芸術は質の劣る単なる娯楽や暇つぶしの道具となってしまいました。しかし、芸術と生活との乖離の傾向が強まれば強まるほど、逆に両者の絆を取り戻そうとする動きも強まります。札幌市は既に半世紀前に制定した札幌市民憲章の中で、「北国のくらしにあった、衣・食・住のくふうをしよう。生活の中に、音楽や美術などを生かしてゆこう」と宣言しており、これはまさに先見性を持った視点というべきでしょう。

## 2.5 多様化した芸術の世界

ただし、半世紀前と現在とでは状況が異なっていることにも注意しなければなりません。近年、再びアートが政治、経済、宗教、民族、性差など私たちの生活世界のあらゆる場面に結びつけるさまざまな試みがなされています。もちろん、現在でも美術館における「美術」やコンサートホールでの「音楽」、劇場での「演劇」、図書館にある「文学」などの「芸術」も私たちにとって掛け替えのないものです。同時に、現代のアートは多様化が著しく、いわゆる参加型のアートであったり、アートプロジェクトであったり、あるいは、アートであるとも気づかれないまま、私たちの生活の中に広く、深く浸透していて、それらも既存の諸芸術と同様に、私たちに生きることの喜びと豊かさを与えてくれるのです。

## 2.6 多様性に対する寛容性のレッスンとしてのアート

もちろん、そのような多様性に対して戸惑いを覚えることがあるでしょう。しかし、好き嫌いは別として、私たちは多様性に対して寛容であるべきですし、逆に、現代の多様多彩なアートは私たちにとってこの寛容性のレッスンとなっている、といってもよいかもしれません。この多様性に対して寛容的であることは、とりわけ価値観の多様化した現代に生きる私たちにとっての大切なことです。例えば、異なった文化圏の生活スタイルに対して戸惑いを覚えることはあっても、その文化的相違を否定する狭量な態度な明らかに過ちです。私たちが他者と、あるいは、社会と結びつくことができるのも、このアートという能力、そして、自らとは異なっているものに対する寛容性あつてのことなのです。このことは、芸術の日常性への浸透という課題にとって極めて重要な前提となりますが、問題は、私たちがこのアートという自身の能力を未だ十分に自覚していない、ということです。

### 3 創造性について

#### 3.1 創造性は、小さな工夫の積み重ね

同様に、「創造性」も私たちに備わっている基本的能力のひとつに他ならないのですが、「アート」以上に、私たちはそれに対して無自覚です。創造性は、「感じ、考え、工夫する」アートの能力の、とくに「工夫する」側面だと考えられます。神と違って人間は無から有を創造することはできません。どんなに独創的な発明・発見も何度もトライ・アンド・エラーを繰り返し、経験を積み、さまざまな角度から検討を加え、そこにいくつかの幸運な偶然が重なって実現するものです。大事なことは結果だけではなく、この過程全体が創造性なのだということであり、実際、私たちは日々、その小さな工夫の積み重ねを実践しているのです。

#### 3.2 孤独な天才からアイデアの共有へ

ところが、近代の「天才」概念によって、結果を伴った創造性を遺憾なく発揮しうる人物は天から特別な才能を与えられた個人だけであって、凡庸な大多数の人間は創造性の恩恵に恵まれていないと思込まされてしまいました。しかし、古代ギリシアの時代には、幸運にも「靈感」を与えてくれるミューズの女神は、個人の中に住み着いているのではなく、誰彼ともなく気まぐれに息を吹きかけては、かの人を創造性豊かな芸術家として活躍させたといえます。もちろんこれは、古代の神話的な説明に過ぎませんが、私たちが心すべきことは、ミューズが息を吹きかけてくる、いつとも知れないその時に、それを受け止める十分な準備ができているか、ということです。しかも、ちょうどこの円卓会議がよい例となりますが、今日、創造性は一人の孤独な才能によって発揮されるというよりも、むしろ多様なもの同士が互いに刺激し合い、自由闊達にさまざまなアイデアを出し合い、情報を共有し合う場においてこそ最もよく発揮されるのです。したがって、そうした場を、さまざまなレベルで常に用意しておくことが必要になります。

#### 3.3 「創造都市さっぽろ」の実質化

札幌市は平成18年に行われた「創造都市さっぽろ (sapporo ideas city) 宣言」で「創造性に富む市民が暮らし、外部との交流によって生み出された知恵が新しい産業や文化を育み、新しいコト、モノ、情報を絶えず発信していく街」を目指す意思を明らかにしました。そして平成25年には、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）創造都市ネットワークへのメディアアーツ分野での加盟が認定されました。ここでいわれる「創造都市」も、上に述べた私たちの普遍的な創造性の能力に根ざして初めて可能になるもので、狭い意味での文化芸術のみならず、都市空間整備、環境、教育、福祉、経済・産業、行財政など、広範囲にわたり、かつ、長期的な視野に立つての指針となるものでしょう。また、メディアアーツ関係では、今年度新たに5都市が創造都市ネットワークに登録されたようです。つまり、札幌は既にネットワークでは先輩になったわけで、今後ますますネットワークのメリットの活用できるようになるでしょう。しかし、私たちには未だ「創造都市」の市民であることの実感がありません。札幌が今後どのように変わっていくのかの実態も見えてきません。「創造都市さっぽろ」の実質化が今後の札幌市の大きな課題となるに違いありません。第3期円卓会議も理念的にはこの「創造都市さっぽろの実質化」という点に帰着し、そのための具体的方策をさまざまに検討しました。

## 4 ふたつの提言

では、アートや創造性が決して人ごとではなく、私たち自身の問題であるとして、それを楽しみ、それを活用し、それと共に生活するためにはどうすればよいのでしょうか。つまり、「創造都市さっぽろ」を実質化し、それを実感できるようになるためにはどうすればよいのでしょうか。以下、これまで議論してきたことを2点にまとめ、今回の私たち円卓会議の提言といたします。

### 4.1 「さっぽろアート」のブランド化

#### 4.1.1 札幌国際芸術祭 SIAF の継続開催

札幌市では、今年度初めての札幌国際芸術祭 SIAF 2014 を開催しました。観客動員数や経済効果といった数値目標は確かに達成されました。しかし、SIAF が「創造都市さっぽろ」の象徴的イベントとして実施されたとしても、先にも述べたとおり、文化芸術を中心にして、あらゆる分野で人とモノとコトと情報の好循環をもたらす「創造都市」は、まだ十分に実質化するには至っていません。なによりも SIAF が市民に根つき、親しまれ、成熟するためにはまだまだ一つ一つ課題を克服しながら、継続して開催することが必要です。

#### 4.1.2 札幌のアートコンテンツ

ただ、SIAF 以外にも札幌にはさまざまなアートコンテンツがあります。PMF、シティ・ジャズ、札幌演劇シーズン、アートステージ、雪まつり、ライラックまつり、花フェスタ、カルチャー・ナイト、オータムフェスト、国際短編映画祭、菊まつり、ホワイトイルミネーション、ミュンヘン・クリスマス市など札幌市が直接的・間接的に関与するもの、あるいは、それ以外にも民間主催で行われているものなど、数え切れないほどです。それは年中行事であり、アートとは無関係だと思われるかもしれませんが、私たちの生活に浸透し、喜びを与えてくれるものであればこそ、どれもみなアートに他なりません。

#### 4.1.3 札幌のアート施設

また、札幌芸術の森、札幌コンサートホール Kitara、教育文化会館、市民ギャラリー、市民ホール、500m 美術館、モエレ沼公園、札幌ドーム、チ・カ・ホ、生涯学習センターちえりあ、各地区センター、さらに芸術文化の館とそれに代わる市民交流複合施設など、ハード面で十分だとはいえないまでも、他市と比べて決して見劣りしているわけではありません。また、市内には活発に活動している民間のギャラリーやホール、シアターなどもたくさんあります。

#### 4.1.4 「さっぽろアート」のブランド化

ただ、そうした数多くのアートコンテンツや施設の運営が、それぞれの実行委員会や縦割りの組織に個別にゆだねられてしまい、相互に連携することがありません。もちろん、それぞれの開催の趣旨や目的、経緯、実施の母体は異なっていて、それは最大限に尊重されるべきであり、個々のコンテンツがそれぞれいっそう充実することが望まれます。しかし、それらが単発に終わらず、相乗効果を生み出すことも必要です。そこで、創造都市としての札幌が1年を通して多彩なアートイベントを開催していることを特徴づけるために、それらを「さっぽろアート」として共通化、ブランド化することを提言します。それは同時に「アートの都市としての札幌のブランド化」でもあります。

#### 4.1.5 「アート都市としての札幌」の実現

ただし、ただ多彩なアートコンテンツを網羅するだけではブランド化することにはなりません。「さっぽろアート」をブランド化するためには、「さっぽろアート」に通底する性格ないしは方向性を明確にする視点がなければなりません。例えば、SIAF 開催中には「アートしてる？」のコピーで明るく楽しいポスターが各所に張り出されましたが、それはまさに「毎日アートしている私たちが楽しく暮らすまち、札幌」のメッセージを伝えるものでした。あるいは、「さっぽろアート」に見たと驚き、涙と笑いの溢れるものであることを示す「面白さ第一主義」というキャッチフレーズを冠してもよいかもしれません。また、「サッポロスマイル」のロゴに「アートしてる？」のコピーを添えて、さまざまなイベントのポスターやチラシ、ホームページなどに掲示するだけでも、アートを身近なものに感じられるようになる、という目的の一助になるかもしれません。色々な方法がありうるでしょうが、しかし、いずれにせよ、私たちの日常の中にアートが深く浸透することを実現させ、そのことに対して私たち自身が誇りと喜びを抱ける状況を作り出すための基本的なコンセプトが大事です。

#### 4.1.6 「さっぽろアート」のディレクション

そのうえで、SIAF やさまざまなアートコンテンツ、施設を横断的に運営するためには、「さっぽろアート」全体をディレクションする人材が必要になるでしょう。将来設置されるアートセンターのセンター長にはそのような仕事を担うことが期待されることです。こうして日常が芸術化されることで、アートに対する需要が高まり、札幌に拠点を置く多くのアーティストによって、更に良質のアートが提供される、こうした好循環が生み出されたとき、札幌はアートの都市として広く認知されるようになるでしょうし、それこそが「創造都市さっぽろ」の実質化の一端であると考えられます。

### 4.2 アート情報のインフラ整備

#### 4.2.1 札幌国際芸術祭 SIAF の課題

SIAF が次回の開催に向けて大きく改善しなければならないことは、広報や営業活動が十分に行き届かなかった点です。確かに、第1回目で、広報や営業のノウハウを持っていなかったということもあるでしょうが、そもそもアート情報を伝えるためのチャンネルないしはインフラが札幌市には整備されていません。そのために、アート情報が必要なときに、必要な人に確実に届いていないというのが実情です。

#### 4.2.2 さっぽろアート・コンシエルジュ (SAC) の創設

確かに、地下鉄大通駅近くに「観光文化情報ステーション」には多くのイベント情報が集まり、また、ウェブでもその情報を確認することができます。紙媒体では、広報さっぽろを通じて折々に知ることはできます。また、各イベントや施設毎に発行しているチラシは溢れるほどあります。しかし、そのどれも不特定多数の人に向けてただ一方的に情報を流しているだけで、必要な人に確実に届けられているわけではありません。そこで、アートの情報インフラの整備を進め、その具体的な担い手としてのさっぽろアート情報案内人(さっぽろアート・コンシエルジュ SAC)を組織することを提言します。その機能は、以下の多岐にわたることが想定されますので、その組織も既存のボランティア組織や各施設の人材などをネットワーク化して、有機的に活用することが必要となります。

- ① **編集** : SAC は「面白さ第一主義のさっぽろアート」をキャッチフレーズに、アート情報誌を編集発行します。これは、音楽・演劇・美術・映画など多様なジャンルのスケジュールの掲載はもちろんのこと、単に網羅的に陥ることなく、アート情報を整理し、作品の観どころ、聴きどころ、インタビュー、作家・作品解説、批評、エッセイ、また市内のギャラリーの紹介、ボランティア通信などを掲載する「さっぽろアート」の総合情報誌となるもので、後述の「さっぽろアート会員」に送付します。紙媒体版とは別に WEB 版や SNS 版も作り、会員の選択可能性を増やすことが望ましいでしょう。
- ② **取材** : SAC は情報が集まってくるのを待つのではなく、自らアートの現場に出かけて「さっぽろアート」の視点で情報の収集を行います。
- ③ **企画** : SAC は、アートと観光、食、プロスポーツなど多様な分野と連携し、また SAC 独自にも参加型のアートプロジェクトを企画運営し、告知するとともに、その特集記事を掲載します。とくに年代を絞る、親子限定にするなどして、特徴あるプロジェクトを組むことが関心を呼ぶことでしょう。「さっぽろアート会員」には、それらのアートプロジェクトに優先的に参加できるような特典を与えます。
- ④ **育成** : SAC は、現在個別に活動している各種のアート関係のボランティア組織やその連合協議団体と連携して、あるいは、意欲あるボランティアを募集して、「さっぽろアート」の取材や解説、企画の中心的な担い手となる人材を育成します。その土壌のなかからやがて、アートのディレクション、キュレーション、マネジメントなどに長けた有能な人材が育つことが期待されます。
- ⑤ **解説** : とりつきにくいと思われる作品にも、ひとこと現場で説明を加えることによって、たちどころに疑問が解消する場合があります。SAC は作品と鑑賞者との媒介者として、フェイス・トゥー・フェイスの解説を行います。
- ⑥ **批評** : 「さっぽろアート」のクオリティーを保つためには、作品の評価が不可欠です。SAC は健全な批評活動によって、作家の成長を促します。
- ⑦ **相談** : SAC は、市民からのアートに関する問い合わせ窓口になります。また、アートを活用した市民生活や企業活動についての相談窓口になります。さらに、現代社会の諸問題（放置自転車、ながらスマホ、ゴミ出し、いじめ、買い物困難地区、除雪トラブル、少子高齢化…）などに対するアートの解決をテーマにしたコンペを実施するなどして、長期的視点でアートの社会への浸透化を図るコンサルタント的役割を果たします。
- ⑧ **営業** : 各種アマチュア団体、愛好家、学生、団体、企業、個人に働きかけて、「さっぽろアート会員」を募ります。統計的には、芸術に強い関心を持っているのは人口の 4 パーセント程度といわれます。それゆえ、まずは 10 万人の会員数を目標に、会費は無料とし、定期的にアート情報誌を送付します。ただし、理想的には、むしろ芸術に対して無関心な人たちにこそ、目を向けるべきでしょう。そのために、協賛企業や各種団体の参加を得て、各種会員特典を増やし、会員であることのメリットを実感できるようにして、より大勢の会員を集められる方策を講じます。また、札幌観光文化情報センターにプレイガイド機能を持たせて、会員には早期チケット予約特典を与えるなどして、チケットの販売力を強化し、従来、主催団体が業者に支払っていた手数料を SAC 活動の原資の一部とします。



## 5 媒介から越境へ

### 5.1 さっぽろアート・コンシエルジュと市民複合交流施設

以上、「さっぽろアート・コンシエルジュ SAC」の業務となると思われるものを列挙しました。直ちにその活動を始めるべきであると考えますが、将来的には、市民複合交流施設に設置が構想されているアートセンターの主要な業務のひとつとなることが予想されます。ただ、危惧されるのは、新設される市民複合交流施設が既存の諸施設と同様に縦割りの管理運営となってしまうことです。この名称はもちろんまだ仮称ですが、その目指すところをあらわしているとすると、「複合」は施設としてホールや図書館、スタジオ、アートセンターなどの多様な機能を持っているという意味に解されます。

### 5.2 「交流」の二重の意味

では、「交流」とはなんのでしょうか。3.2でも述べたとおり、今日、創造性は一人の孤独な才能によって発揮されるというよりも、むしろ多様なもの同士が互いに刺激し合い、自由闊達にアイデアを出し合い、情報を共有し合う場においてこそ最もよく発揮されるのです。したがって、この「交流」にも、ひとつには市民がオープンな議論を交わす場、さまざまな立場の人が情報を交換する場、従来は無関係であった者同士が出会う場、異なる世代、異なる業種の交わりによって思いもかけない化学反応を起こす場、そのような場を創設するという意味が込められているでしょう。

さらに、この「交流」は、縦割りの運営で相互に連携し合うことのほとんどない既存施設を横断的あるいは越境的に結びつけ、新たな「さっぽろアート」を生み出す、そのような施設間の「交流」の場でもなければなりません。そのような二重の意味においてこそ、この市民複合交流施設は「創造都市さっぽろ」のまさに拠点施設となりえるのです。

### 5.3 越境の困難を克服するリーダーシップ

第3期円卓会議では、ハード的には市民交流複合施設が、ソフト的にはアートセンターがこのような横断的・越境的業務の中核となり、さっぽろアート・コンシエルジュが媒介者としてその具体的な業務の担い手となる、という構図を描きました。しかし、SACが主体的に活動すればするほど、SACは単なる媒介者ではなく、越境者とならざるをえません。そうした越境が実現することを大いに期待しているわけですが、それは決して容易ではありません。なぜなら、その活動は結果的に、従来、別の既存施設や組織が担っていた業務にまで踏み込むこととなり、そこには相当の軋轢が起こると想像されるからです。そのため、SACが存分に活動するためには、この施設の長、あるいはアートセンターの長が、強いリーダーシップを発揮する必要があるでしょう。

## おわりに

以上、「アート」や「創造性」に対する意識的・無意識的障壁を可能な限り取り除き、私たちの日常性を芸術化するために、「さっぽろアートのブランド化」＝「アートの都市としての札幌のブランド化」して、私たち自身が日々、ここ札幌に生活することに誇りと喜びを実感できること、また、アート情報を必要としている人に対して確実に届けられるようなインフラの整備＝「さっぽろアート・コンシエルジュ」を組織すること、この2点を提言します。そのことは同時に、私たちの札幌市民の経済活動や文化活動を活性化させ、日常性を豊かにし、今日、私たちの抱えている諸問題への解決の道筋をつけることを目指す「創造都市さっぽろ」の実質化に寄与するはずで

今回、札幌文化芸術円卓会議という創造的な議論の場に参加させていただいたことに対し、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成27年2月9日

平成25/26年度 札幌文化芸術円卓会議委員

石川 伸一  
尾崎 要  
北村 清彦  
清水 朋子  
鈴木 瑠惟夏  
富田 哲司  
南 聡  
山田 修市  
尹 美成